



島根県横田町

沢田宅裏遺跡  
鎧免大池遺跡  
澁谷遺跡

# 調査報告



82

育委員会

沢田宅裏遺跡  
鏈免大池遺跡  
澁谷遺跡

調 查 報 告

# 巻頭によせて

横田町教育委員会

教育長 糸原正徳

## 1. 沢田茂利宅裏遺跡について

昭和57年度において施行が予定されている大馬木地区の圃場整備事業遂行にあたり、該当地区内に、鳥根県遺跡目録に登録されている周知の住居跡、横田町大字大馬木845番地に所在する「沢田茂利宅裏遺跡」を発掘調査したものである。

当初は、昭和32年頃、沢田氏が個人で開畑ならびに水田造成をされ、その折の若干の出土品はすでに蒐集されておる。今回は住居の遺構として柱材の根部とその配列等について記録にとどめることができた。

## 2. 鐘免大池遺跡について

沢田宅裏遺跡と併せて、横田町大字中村字鐘免地内に存在する周知の「大池遺跡」を発掘調査した。当初は近く国営農用地開発パイロット事業に依って開畑が行われるものであり、そのための予備調査である。

この辺一帯は南面の丘陵地区で、古代の住居跡・古墳が点在している。本遺跡は土器の散布地として登録されているが、開畑されて以来かなり整理されているし、傾斜地で相当流出して現在はほとんど遺跡の姿は消滅されてしまっている。

## 3. 渋谷遺跡について

上記の調査に併せて、昭和56年度事業として発掘調査した渋谷遺跡は、横田町大字大馬木字旭地内にある古墳前期のものとして推定される住居跡である。これは、町道湯之廻柏原線の拡幅に伴う事前調査であるため、予想される全面の解明は後日に譲り、その前段に当たる一部分の発掘に留めた。

本誌に19ページの写真で紹介したA・B二棟の住居跡が確認された。特記すべき発見は、

- (イ) 支柱が四本立てでなく二本であること。
- (ロ) 住居に通じる道と思われる階段があったこと。
- (ハ) 農耕関係の鎌、その他が出土したこと等々。

住居跡の発掘は、本郡においても初めてのことであり、近い将来全面発掘調査が望まれる。

# 目 次

巻頭によせて	横田町教育委員会教育長 糸 原 正 徳
例 言	
調査位置図	
I. 沢田宅裏遺跡	1
1. 位置と環境	1
2. 調査に至る経緯	1
3. 調査の内容	1
4. 遺 物	2
5. ま と め	2
II. 大池遺跡	7
1. 位置と環境	7
2. 調査に至る経緯	7
3. 調査と成果	7
4. ま と め	8
III. 渋谷遺跡	12
1. 位置と環境	12
2. 調査概要	12
3. 遺構の概要	12
4. 遺 物	20
5. 小 括	21
(補考)	22

# 挿 図 目 次

図 I-1 沢田宅裏遺跡位置図	3
図 I-2 沢田宅裏遺跡調査図(畑地部分)	4
図 I-3 沢田宅裏遺跡トレンチ図(水田部分)	5
図 II-1 大池遺跡地形図	6
図 II-2 大池遺跡グリッド配置図	10
図 II-3 大池遺跡グリッド及びトレンチ断面図	11
図 III-1 渋谷遺跡地形図	16
図 III-2 調査区域図	16
図 III-3 有段窪路遺構図	17

Ⅱ-4 B <sub>1</sub> B <sub>2</sub> ピット平面図	18
Ⅱ-5 A3号住居址	18
Ⅱ-6 渋谷遺跡A区域遺構配置図	19
Ⅱ-7 A2号住居址	19
Ⅱ-8 渋谷遺跡出土の土器(1)	23
Ⅱ-9 渋谷遺跡(A区)出土の土器(2)	24
Ⅱ-10 渋谷遺跡(B区)出土の土器(3)	25
Ⅱ-11 渋谷遺跡出土遺物(B区)	25
Ⅱ-12 (参考)日焼田1号住居址の土器(1)	26
Ⅱ-13 (参考)日焼田住居址の土器(2)	27
Ⅱ-14 (参考)追谷住居址出土の土器	28

## 図 版 目 次

	P
田宅裏遺跡	
遠景	1
近景	1
柱根/柱列と敷石群/出土品(鉄滓・陶片・柱根)	2
池遺跡	
遠景	3
近景	3
谷遺跡	
遠景	4
近景	4
A3住居址出土全景	5
同掘下げ全景	5
A3出土状況	6
階段路遺構A	6
階段路遺構B(断面)	6
A1住居址	7
A2住居址	7
A3住居址出土遺物	8
据石	9
黒曜石片、磨石	10
BP <sub>2</sub> 土器出土状況	11
BP <sub>2</sub> 鉄鎌出土状況	11
紙	(渋谷遺跡遠景)

## 例 言

1. 本書は昭和56年から57年にかけて横田町教育委員会が行った沢田宅裏遺跡、大池遺跡、渋谷遺跡の調査報告である。
2. 本調査は杉原清一、東森市良が担当し、補助員として小川敏子があたり、横田町教育委員会の三成輝夫が事務局を担当した。
3. 本調査には横田町文化財専門委員の高橋一郎、並河孝義、石倉要一各氏の御助言と速岡法輝氏の御助言を得、杉原 聡君には特に沢田宅裏遺跡調査で協力を得た。
4. 出土遺物の整理は専ら杉原と小川が当った。
5. 本書の執筆は東森と杉原があたった。
6. 図面の作成は杉原、東森が行い、浄写は井上洋子、中村慶子、勝部 昭氏の御協力を得た。編集は、東森が行った。
7. 本調査の従事者は下記の通りである。

### 沢田宅裏遺跡調査 (56年7月)

落 合 良 茂	真 田 宝之助	藤 崎 昭 徳
杉 原 聡	沢 田 吉 江	落 合 富士子
足 立 一 江		

### 大池遺跡調査 (56年11月)

佐 世 川 徳 雄	小 川 敏 子	杉 原 栄 子
渡 部 公 雄	安 部 恒 吉	

### 渋谷遺跡調査 (57年2～3月)

吉 川 良 一	千 原 房 雄	吉 広 明 夫
渋谷 允 雄		
木 村 悦 子	安 井 和 子	千 原 君 栄
渋谷 マツ子	山 脇 益 子	阿 合 寿 子



# I. 沢田宅裏遺跡

## 1. 位置と環境

大馬木の中心地から南に入るとかなり開けた水田地帯がある。遺跡はその奥まった谷あいの西に面する丘陵裾にあり、水田及び畑地として開墾された際に発見された。附近には目立った遺跡は存在しないが、弥生時代以降現代に到るまで生活遺地として考えてよいところである。

## 2. 調査に至る経緯

本遺跡は昭和32年地主の沢田茂利氏が山裾を削って畑地並びに水田として造成した際に杭、磨製石斧、弥生土器が検出されて注目されたものであり、古く昭和38年刊の「島根県遺跡目録」にも「沢田茂利宅裏遺跡」として記載されており、当時の遺物は八川中学校高松教諭によって中学校に保管されたということである。

沢田氏によると、開墾以前の地形は小水田と竹藪とからなり、これを表土下2メートルぐらいの水で流して耕地化したということである。今回調査に及んだのは水田が圃場整備されることとなり遺構の消滅が考えられたからである。

調査は水田と圃場整備工事の対象外ではあったが隣接する畑地に及んだ。ちなみに水田の地番は横田町大字大馬木迫845の1番地、畑地は同サコ845の6番地である。

## 3. 調査の内容

調査は昭和56年7月18日から7月31日まで行った。主要な眼目の水田の方は杭が出たというところを中心としてトレンチを設定したが、かなり深く耕作されており、遺構、遺物は検出できなかった。なおこのトレンチは水田をはさんで山裾にいたる畑地にも設けたが、ここにおいても異常は認められなかった。そこで圃場整備工区外の隣接する畑地を調査することとし、ここにトレンチを設定した。調査に当たってKBMを沢田宅庭488.20mとし現場に490.66mの基準点を設定した。トレンチはNトレンチ、Sトレンチとし、それぞれ拡張部分をともなう。その結果Nトレンチにおいて柱列を検出、間隔は約1.8mのものと判断された。この柱根が北から5基並んでいる。特に最も北の柱根は梁材の柱根がそのまま残り底に石を置いて柱を安定させる働きをさせている。地層は表土下暗褐色ブロック入り土、黒色ブロック入り土、黒色火山灰土となっており、この層に平石をすえているわけである。柱根2も細いが石をつめ火山灰土に及んでいる。

柱根3はやゝゆがんでいるが黄褐色砂土に木材の皮のみ残して残存した。柱穴5、6は木質の遺存を認めない。なおW拡大区において柱穴と石敷群が認められた。柱穴はNトレンチ6柱穴より北にふれるが3穴認められその北側に敷石群がある。石群は大小の石から成りレベルはほぼ同じである。この石群がどのような目的で並べられたかはその状況が余りにも雑然としていて明らかでない。石列の底はブロック入黒色土から更に下の砂礫土にいたっている。

#### 4. 遺 物

本調査で出土した遺物は、土師器小片1、鉄滓4、木炭片1、糸切底土師質土器片1、高台付陶器片1、糸切底須恵器片1、藍染付陶器片1、柱根（栗材）1、栗材皮1である。

#### 5. ま と め

本遺跡は元来弥生時代のものでされ台帳にも記載されて来たが、今回の調査の結果すでに弥生時代の遺物包含層は失われており、近世の住居址が検出されるにいたった。

近世住居の発掘調査例は少なくこれが極めて貴重な例といわざるを得ない。近世住居址とした根拠は二点ある。その一つは柱穴と柱根の関係である。現代においてはたとえ独立柱といっても柱そのままの柱穴を掘るのが現状であるが、この住居址の柱穴は柱根よりも大きく作られ底石を置いている。その二つは沢田家にこの地に住居があったという伝承はなく、現在の沢田家の家号が「前敷」となっていることである。これは前屋敷の略称であろう。4間×4間ぐらゐの建物はこの地に立っていてもおかしくない。また、すでに掘り込まれているが現水田についてもかつてはこの地に柱列が存在したことは想像にたかない。今後許されるならば畑地の全面発掘を行ない近世住居の全容を明らかにする機会を得たい。

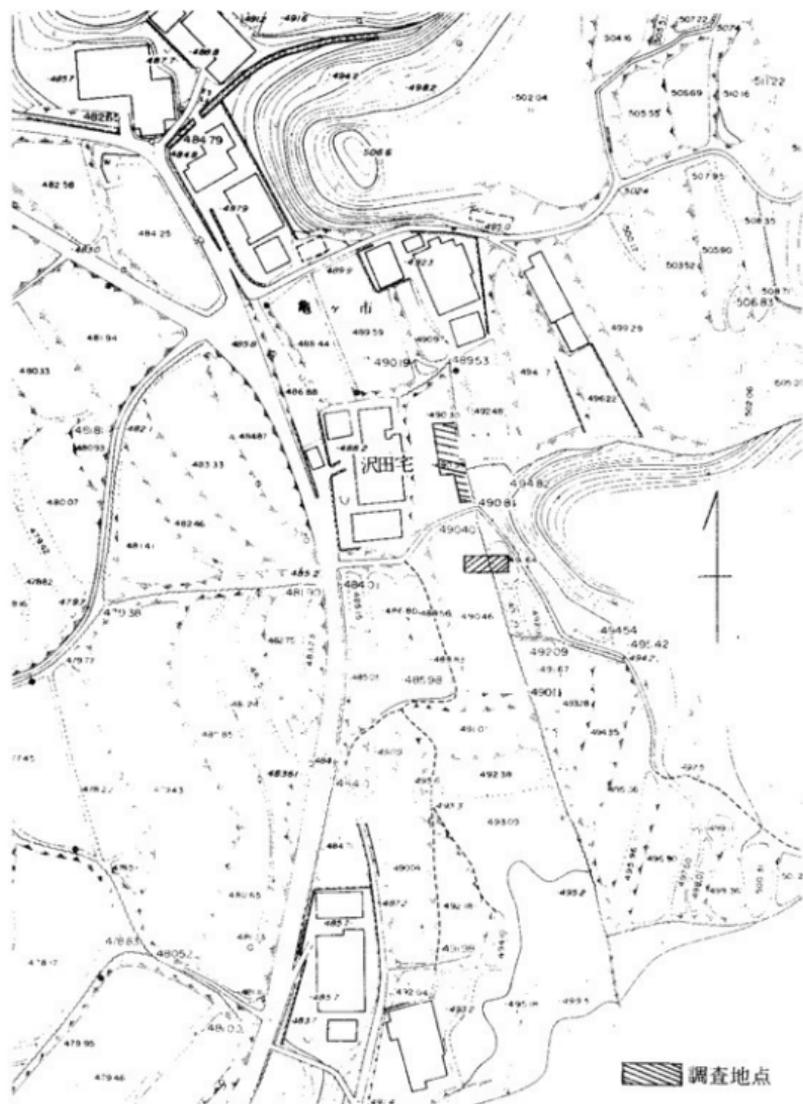


図 I - 1 沢田宅裏遺跡位置圖

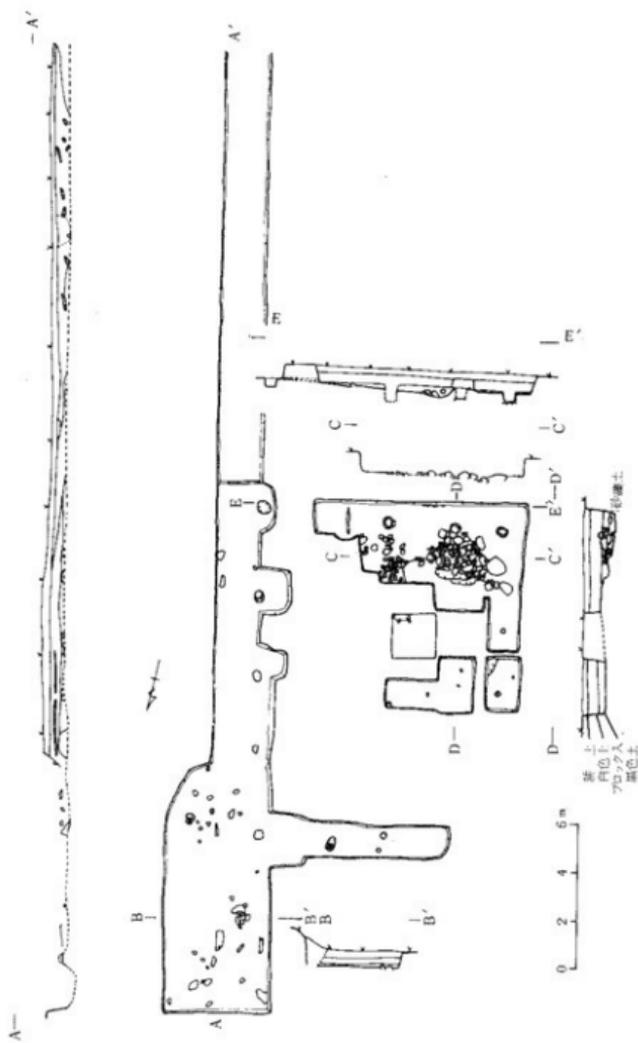
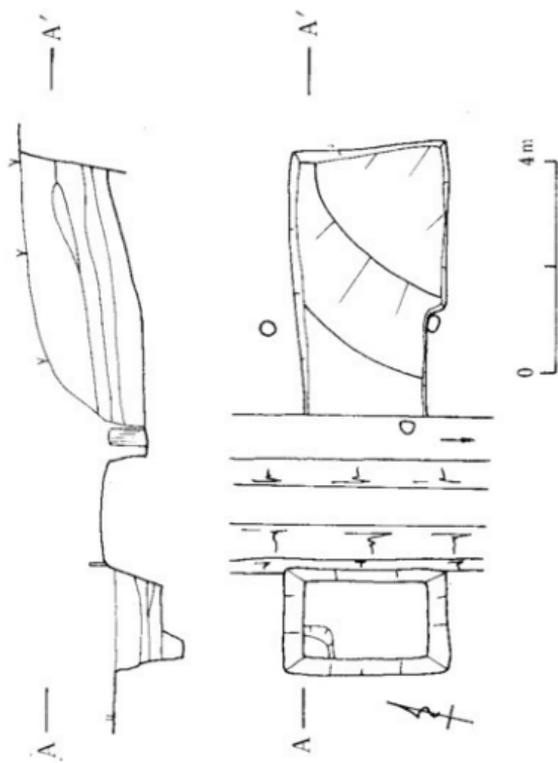


図 I-2 沢田宅裏遺跡調査図 (畑地部分)



図I-3 沢田宅裏遺跡トレンチ図(水田部分)



図II-1 大池遺跡地形図

## II. 大池遺跡

### 1. 位置と環境

斐伊川上流横田盆地の北辺山麓に位置し、低丘陵に囲まれて南東に開く比較的平坦な浅い谷地形である。一部畑地とそれに続く山林であり、畑地はかつて桑園地として拓かれたところである。南200mの丘陵端には未調査の小池古墳群があり、東方700mには太田山古墳や弥生時代後期以降の遺物が出土する和田山遺跡等がある。西南600mには銅剣の出土地とされている横田八幡宮が、北方1,000mの山腹には岩屋寺の古刹があり、その下方には弥生～古墳時代の遺物が散布する岩屋寺遺跡がある。

このように横田町内では遺跡の密度の高い地帯に相当する。

### 2. 調査に至る経緯

横田町では国営農地開発パイロット事業が数年来行われている。昭和45年、計画予定地について遺跡分布調査を行い、該地内の畑から数片の土師器片を得て、遺物散布地として本遺跡の発見となったものである。

この遺跡を含む工区は昭和57年度着工の予定となったので、事前にその性格と範囲を確認することを目的として昭和56年11月に試掘調査を行った。

### 3. 調査と成果

#### 調査：

畑地を含む谷あいの平坦部分約50m×60mの範囲を対称とし、傾斜方向を基準に10m間隔の方眼点に2.0m方角のグリッドを15設定し、さらに畑地部分では横断方向にグリッドを結んで巾1.0mのトレンチを掘り、また補助的にボーリング樺にて補間観察した。

#### 土層：

調査区域の土層構成は、黒色火山灰土（クロボク）を地山とし、その下層は漸移して黄褐色粘質土であり、この地方に普通に見られるクロボク地帯の層序と同じである。このクロボク土の上に、ほぼ全域にわたって粗粒の砂を含む黒色土があり、この土層に畑地が拓かれて耕土にもなっている。この含砂黒色土はクロボクに由来するものであるが、花崗岩質粗砂粒を含むことから、上方の山腹から何らかの理由により流入堆積したものと判断される。なお山林部分の表土は腐植物質を多く含み、暗褐色を呈している。

畑地部分で、地山面へところどころ耕作土の回入部分が認められたが、これは桑園廃

止の際に発根した痕跡であった。

全城にわたって遺構と見られるものは検出されなかった。

#### 遺物：

出土遺物は土器片のみで、畑地耕土から主に、一部含砂黒色土中から、いずれも著しく磨耗した土師器等の細片がわずかに採取されたが、包含密度は極めて粗である。器壁外面に煤の付着したものもあるが、器形をうかがい得るものは全く無く、数点の須恵器片も有る。

#### 4. ま と め

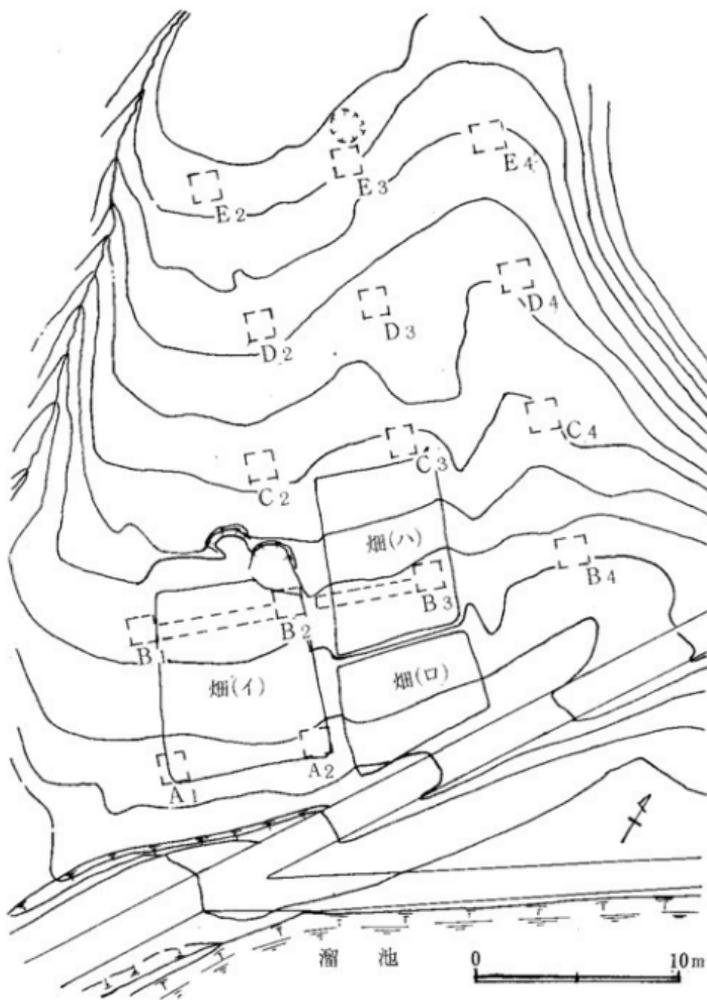
横田盆地の北辺山麓にある本遺跡は遺跡密度の高い地帯にあるが、検出された若干の土器片はすべて、自然堆積のクロボク土をベースとしてその上に流入堆積した粗砂を含む二次堆積土中のみからであり、ベースとなっているクロボク土面にも何らの遺構も検出されなかった。

遺物は主に畑地部分から採取され、煤の付着したものも含む土器片で、多くは土師質であり、若干の須恵器片もあるが、すべて著しく磨耗しており、時代判断は困難であるがおよそ古墳時代後期ごろと思われる。

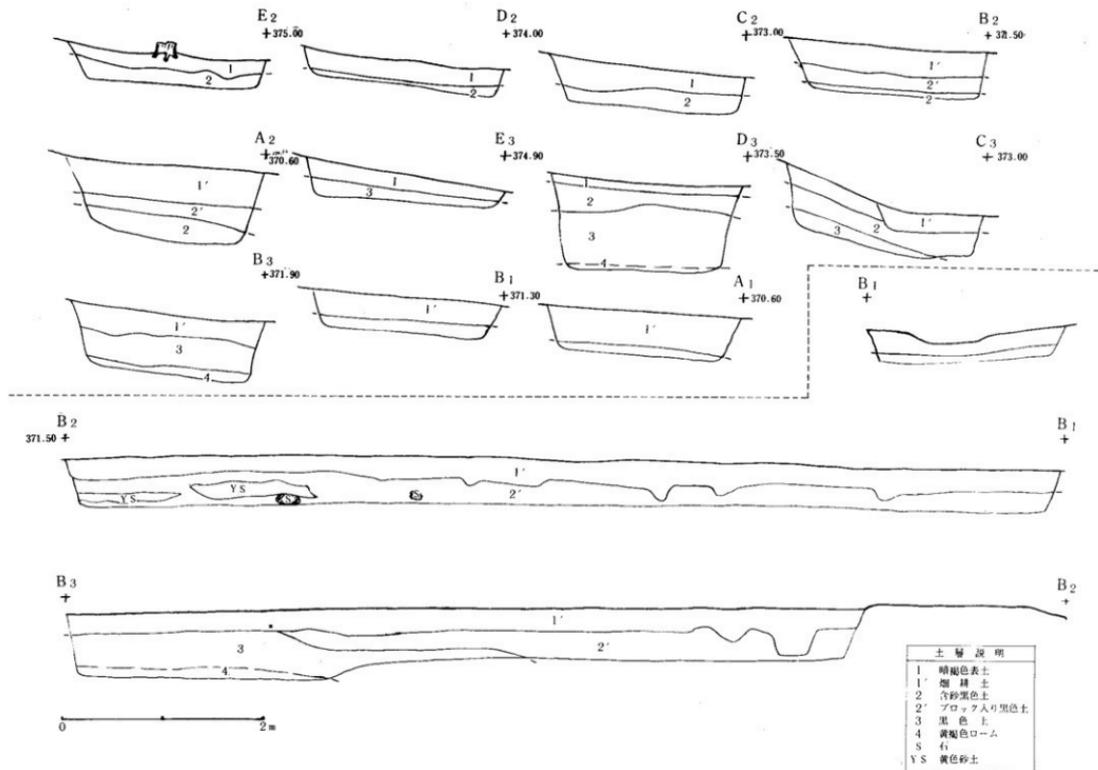
遺物出土量の少いこと、すべて流入土中にあり磨耗していること、遺構の検出されないこと、上方の山腹から何らかの理由により黒色土が流されていることなどから、若干の遺物は散在したが遺物包含層と云えるほどでもなく、遺跡と呼ぶにはあたらないものと判断された。

大池遺跡出土土器一覽

発掘区	出土層位	品名	特徴	数量	備考
A <sub>1</sub>	耕土下面	土師器片		1	細片
B <sub>1</sub>	耕土中	"		1	" 磨耗
C <sub>3</sub>	表土中	"		1	" "
D <sub>3</sub>	表土下面	"		3	" "
畑 (付)	表層採取	"		1	細片磨耗
畑 (回)	耕作土下面	"		1	"
畑 (回)	表層採取	"		4	" " 煤付着もあり
畑 (回)	表層採取	須恵器片	内面叩目文あり	2	(皿状品とみられるものあり)
畑 全域	表層採取	土師器片		17	細片、磨耗、煤付着品もあり
合計		{ 土師器片 須恵器片		29	
従前採取品					
		{ 須恵器片 厚手、叩目文あり 土師器片 磨耗、煤付着		1	
	S49年5月9日			2	
	S45年分布調査時	土師器片 煤付着		4	



図Ⅱ-2 大池遺跡グリッド配置図



図II-3 大池遺跡グリッド及びトレンチ断面図

# 1. 渋谷遺跡

## 1. 位置と環境

渋谷地区の水田地帯の南側に長く延びている低丘陵の突端部にあり、水田からの比高約15mの平坦な頂部付近にあたる。東方約500mの谷入口部には縄文土器の出土した曲谷遺跡がある。

標高470mのこの位置では、丘陵上は広くほぼ平坦で、現地表土からも住居跡とみられるわずかに凹入する部分が数箇所見られ、また端部の崖面には周溝を有する住居跡床面が露呈し、附近の崩土中には古式土器破片が散見された。また東側の水田へ下降する小谷状地形の部分にも遺跡が予想されるテラス状地形が認められたが、既に町道によってその大部分は削り去られているとみられる。

## 2. 調査概要

工事計画が現状切通し部分からさらに1～6m巾で山地部分に拡張されることとなったため、その施工計画部分について丘陵頂部分（A地帯）は全発掘とし、東側凹谷部分（B地帯）は短いトレンチを設定して調査した。トレンチは5m間隔を基本にB<sub>1</sub>～B<sub>6</sub>と（随時これを拡張）した。A地帯の全発掘は5m間隔にA<sub>1</sub>～A<sub>6</sub>に区分した。

この丘陵は典型的な黒色火山灰土（クロボク土）で覆われており、その下には黄褐色粘質のロームが厚く堆積している地帯である。

このクロボク土中には多くの土器破片が混在し、ほとんど全区にわたって散在し、南上手の丘陵上に予想される遺構からの転落流入を示していた。

検出した遺構はB<sub>1</sub>区から土城2基（B<sub>1</sub>P<sub>1</sub>及びB<sub>1</sub>P<sub>2</sub>）、B<sub>1</sub>区で竅穴式住居跡の一部分（B<sub>1</sub>）A<sub>1</sub>区から一部崖面に窺容された竅穴式住居跡の隅角部分（A<sub>2</sub>）、A<sub>6</sub>区で同じく住居跡（A<sub>3</sub>）B<sub>7</sub>～B<sub>8</sub>区では崖面に断面の見られた住居跡（A<sub>1</sub>）のわずかな残存部分があり、A<sub>6</sub>～A<sub>8</sub>区にかけて踏圧された歩道が認められ、それはさらにA<sub>6</sub>～A<sub>8</sub>区の掘り込み有段崖道へと続いているのが検出された。なおA<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>住居址相互間の前後関係は黒色土中の層位判定が困難であったことから確認出来なかった。

## 3. 遺構の概要

### （B<sub>1</sub>P<sub>1</sub>）土城：

地山から深さ0.8mで巾0.7mのほぼ方形に掘り込まれており、断面下方は黄色粘質の地山土が黒色土でその上には約45cmの黒色土の流入が見られる。この流入土層中には、土

陶器の破片が多数混入していたが、域内には何らの遺物も見当らなかった。時代は不明であるが次のBP<sub>2</sub>との切り合いからみてそれ以後の古墳時代後期以降のものだと判断され、堅穴状の墓塚と思われる。

#### BP<sub>2</sub> 土塚：(図2平面、断面図)

BP<sub>1</sub>に接した位置に地形等高線に平行する不整形の浅いピットで、東西1.9m、巾0.6～0.8mを計る。両端に須恵器の瓶片や蓋杯の坏部1が、土師器片と共に置かれている。また東端部近くには鉄製の鎌がおかれていた。この土塚の北側前壁は地山上に土を盛って版築状としてあり、ピット底は地山を浅く削ったもので深くは掘り込まれていない。このピットは墓塚とみられ、出土土器や鉄鎌の形状から古墳時代後期後半のものと思われる。

#### B<sub>1</sub> 住居跡：

丘陵上から東側斜面に移る部位の急斜部分を地山まで削り出して整地した住居址で、南隅の一部分を検出した。側壁下には浅い側溝を設けた床面は柱穴があり、側柱と判断された。側壁や側溝は直線であることから、方形のプランとみられるが、南隅の一部分のみ発掘したもので、さらに東方～北東方向の低位部は流失しており、全体のプランは不明である。埋没した流入土中からは土師器片が認められるが、床面からは遺物は採取されなかった。時期は不明であるが黒色土流入の状況からA<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>住居址のそれとあまり隔らないところと思われる。

#### A<sub>1</sub> 住居跡：

崖面に断面が巾4.5mにわたって露呈していたもので、東方山手側に巾30cmほど床面が残存していた。地山を削り出した側壁下には浅い側溝があり、それに沿った床面に80～90cm間隔の杭穴列が認められ、また壁面近く小溝を敷いた区画があった。この住居跡は床面一面に木炭片が散布し、直径5～10cmの丸木材の炭化したものも認められた。このような木炭の散布状況から火災によって廃絶したものかとみられる。主柱等は不明であるが、平面プランは隅丸方形となるようである。床面縁辺の杭穴列は側溝には接したもので草編み壁の芯を思わせるものである。

この床面からは土師器片が採取され、またかつて調査以前に崖面露呈床面の側溝から土師器の破片を加工して作った有孔円板が採集されている。

## A<sub>2</sub> 住居跡：

この住居跡は丘陵のほぼ頂部から北に傾斜する地形へかけて存在したもので、住居跡の東南隅部分のみが残存していた。北側の盛土築成部分は自然崩土による流亡となり西側は既に掘削によって床面にその断面が露呈していた。地山に沿って掘り込んだ壁面下には浅い側溝を設け、それにならって1.20m間隔の柱穴が並ぶが、主柱ではない。切り壁上端の周境上には斜入する小柱穴が敷在して屋根材の端部位を示しており、上屋構造の一端が何われる。平面プランは方形をなすと思われるが規模は不明である。床面からは複合口縁の土師器片と砥石が出土し、鉄製刀器の使用を示唆している。

## A<sub>3</sub> 住居跡：

A<sub>3</sub> 住居跡は一棟完全発掘を行った。南北1.7m間隔の主柱2穴を有する四角方形プランで、側溝を伴う床面は3.50m×3.60mを計る。丘陵頂部の比較的平坦な場所で西のやや低い地形に四圍が完全に掘り込まれた堅穴式住居である。掘り込み壁高の最も高い東側で70cm、最も低い西側では30cmを計る。この西側壁中央に三段の階段を掘り込んで出入口をつくり、その戸外境上に門柱状の柱穴を伴っている。

床面ほぼ中央には25×35cmの扁平長方形川石の掘石があって作業台とみられる。それに接して床面中央には45×43cm、深さ33cmの方形ピットが掘られてあり、貯蔵穴と判断される。東壁中央寄り部分に炭灰の散布と床に弱い焼面が認められることからが跡と判断されるが、南側主柱近くにも若干の焼土面と炭灰が認められた。戸外の外境上には掘り方に沿ってやや不規則ながら小柱穴が配列し、さらに地形上手にあたる東～北部分では、その小柱列の外側に浅い側溝がそえられている。小柱列は上屋の外支柱であり、その外を囲る側溝は戸外の表面水を除く排水溝と判断される。

床面の概ね東側半分で土師器を多く採取した。単口丸底甕が多く、小形品も含んでいる。須恵器片は1点もないことから、須恵器導入直前のころの住居跡であると判断される。

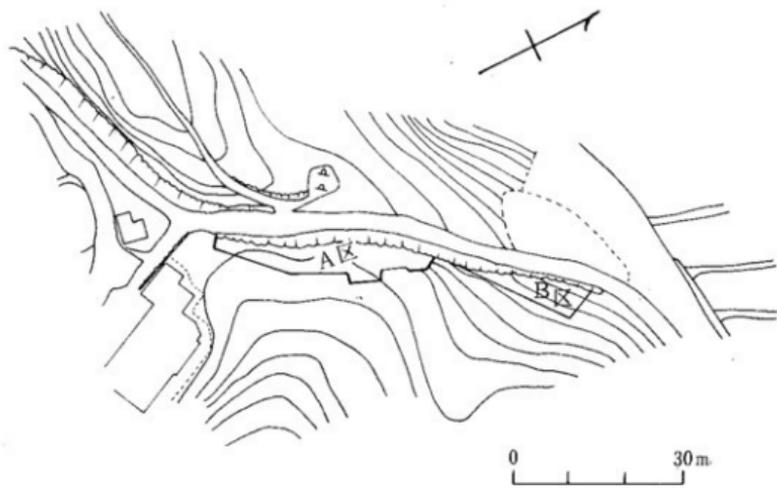
## 踏圧路及び有段窪路遺構：

通路址は丘陵上の屋根沿い北西方向に走るものと、これから分岐して南西谷間水田地帯方向に下降するものがあり、この下降路の急になる部分は窪み状に地山に達する掘り路としさらに足かかりの凹入部が階段状につくられていた。本文では前者を「踏圧路」とし後者を「有段窪路」と仮りに呼称することにする。

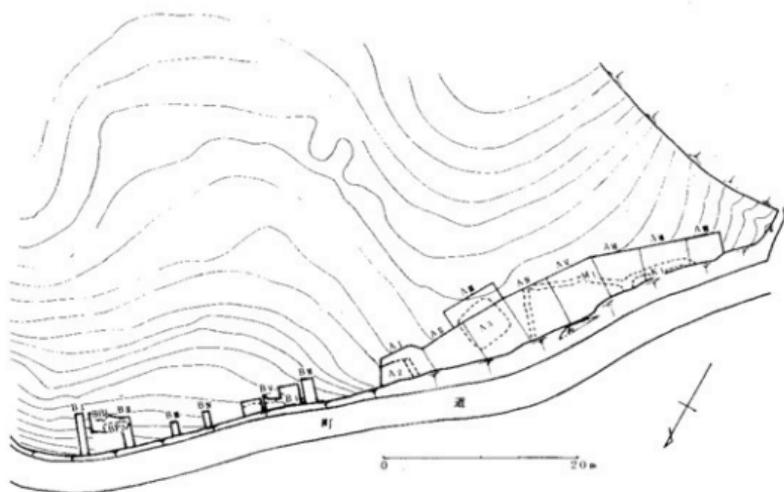
踏圧路はAⅡ区からAⅢ区にわたって検出し、総延長17.5mを計る。路巾は、概ね40～60mである。路面は黒色土の地表土層中にあり、明確には分層し難いが旧地表面とみられる部位にあり、厚さ10～15cm程度が踏圧で固いベースとなっている。

この踏圧路面は、黒色土層中に存在するため、調査した住居跡への接続は明確には把握出来なかったが、状況からして相互関連のものと思われる。

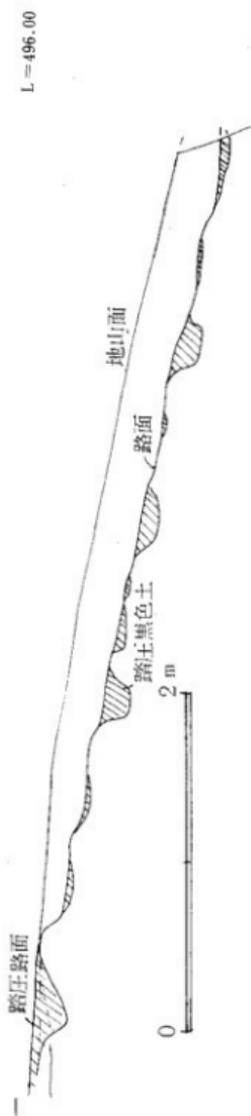
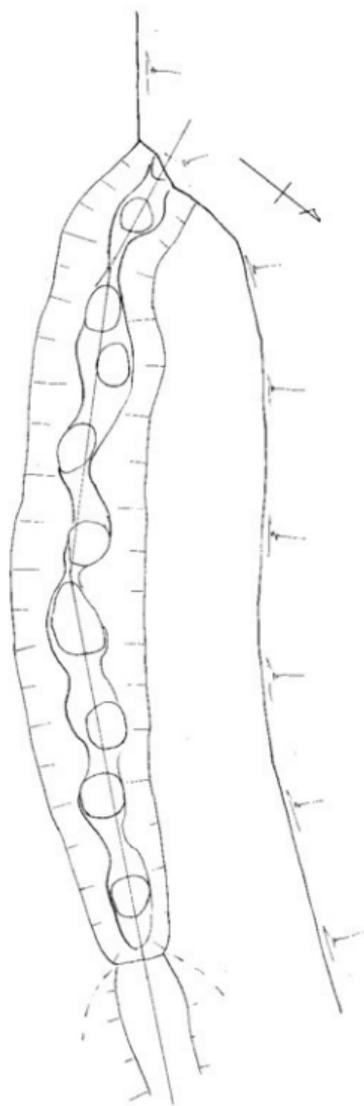
この踏圧路に接続する有段窪路はAⅢ区で検出され、長さ5.0mを計り崖端に達する。地山にU字状の溝を掘り、底巾30～40cmとしさらに直径25～35cmの凹みを40～60cm間隔で階段状に掘り込んであり、黒色土が堅く踏み締められて足掛り状となっている。急斜面の通路としては今日の樵路とはほとんど共通する構造と云えよう。



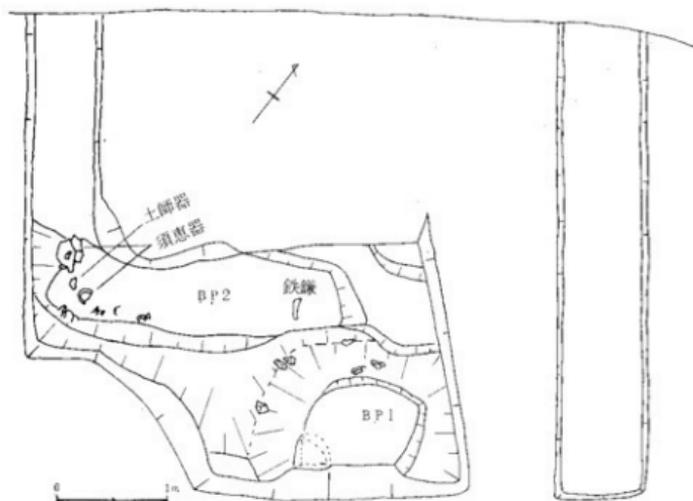
図III-1 渋谷遺跡地形図



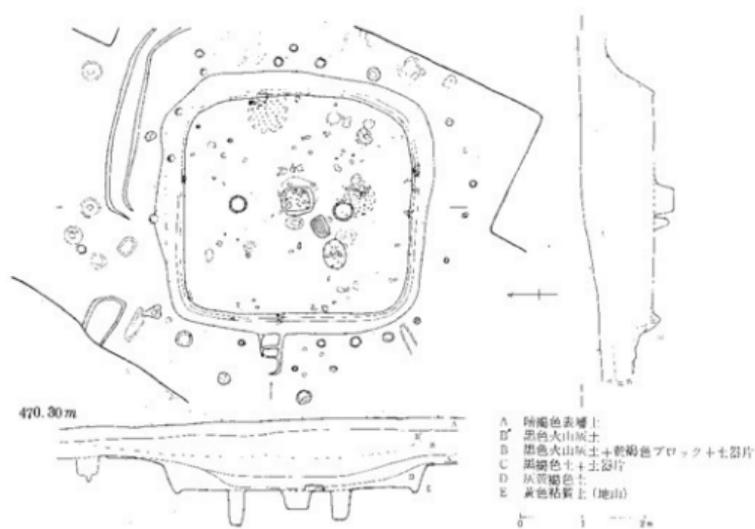
図III-2 調査区域



图Ⅲ-3 有段路构造图

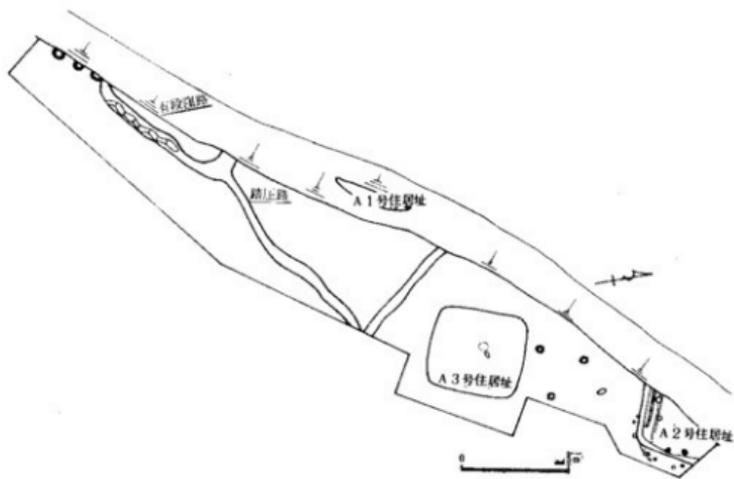


図Ⅲ-4 B1、B2ピット平面図

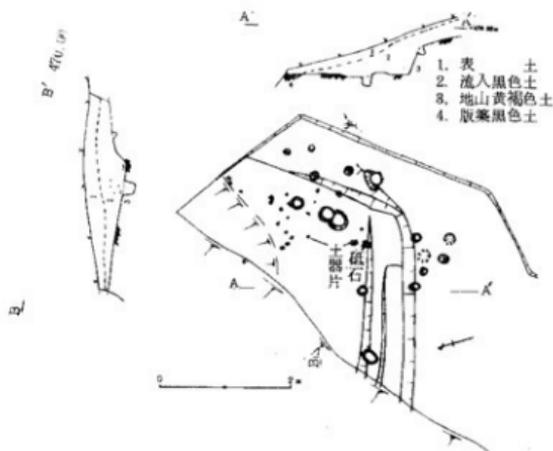


図Ⅲ-5 渋谷A3号住居址

- A 暗褐色表層土
- D' 黒色火山灰土
- B 黒色火山灰土+新緑色ブロック+土器片
- C 暗褐色土+土器片
- D 灰質褐色土
- E 黄色粘板土(地山)



图Ⅲ-6 洪谷遗址A区域遗构配置图



图Ⅲ-7 A2号住居址

#### 4. 遺物

出土した遺物は埋土中（黒色土）のものと同住居址に密着して出土したものとがあり、A区とB区ではまた異なる。埋土中出土の土器は甕形土器口縁が多く総じて古式の様相を呈している。それに対して住居址出土のものはA3号住居址、BP<sub>2</sub>ピットから出土したものでいずれも新しく、土師器と須恵器のちがいはあるものの、いずれも須恵器出現後の土器である点が注目される。

まずA3号住居址出土の土器であるが、いずれも小形で、最大の壺はL字状の口縁をなし、黄白色で胎土中に砂粒を含み焼成は良く、外面は斜格子状に条痕が入り、内面は頸部以下削り放して外面にすずが附着している。小形の壺は手ごね状のつくりで内外面とも黒褐色を呈し外面にすずが付着、L字口縁の上下全体にかき目が入る。そしてこれらの中にL字に屈折した肩部に一つの稜が付き、そこでカーブが変るものがあるが器形の上での特徴をなしている。このような特徴を持たないものもL字状口縁の小形壺であることには変りはない。なおこれらの中にやはり小形品であるが、粗製の手つくな状の壺があることが注目される。なお甕形土器と思われるものはL字口縁をなすが、薄手で丁寧につくられ、口縁内外面ともヘラによる横なのでのち外面には斜行のハケ目痕が残る。そして内面頸部以下は削り放してある。また壺が一個体あるが外面はかき目で調整をした痕跡が残り内面は斜の指の指で仕上げである。焼成は良く淡黄白色を呈する。

A区住居址でまとまって土器が出たのはこの3号住居址だけであるが、このほかA区の黒土層からは同様のL字口縁の甕形土器片のほかにも多量の複合口縁を持つ甕形土器の口縁が出土している。色は灰褐色から赤褐色とさまざまであり、口縁の立ち上りや傾斜の度合いも多少の変化があるが、ほぼ同時期とみて良いものばかりである。これらの中には口唇を平らにつくりその中央が凹線状になるものも含まれている。甕形土器の肩部の破片は淡黄色を呈し、滑手のつくりで脚による6条の波状文が入る。これは複合口縁の甕形土器となるものである。この他に小形壺の口縁と思われるものが出土しており、濃い赤褐色で胎土はきわめて密、焼成は良好で内外横みがきの仕上げである。また甕形土器片の中にL字口縁の口縁端内面をつまみ上げたものが一片ある。高杯脚端部は赤褐色で胎土密、焼成も良い。外面みがき、内面などで仕上げで凹線気味の脚端部となる。そして一対の円孔が入る。また器台上部とみられるものは淡黄色で胎土はやや粗く砂粒を多く含む焼成はもろい。内外面とも横で仕上げである。これらの土器以外にはA区では2号住居址の砥石をのぞいて出土遺物はみられない。

B区の遺物は土師器が多いが殆んどA区から流入した細片で、これらは形態的にもA区出土品と変わらない。

土師質土器片は外面は整った格子目文、内面は平行線上の浅い叩き目がみられ、大形甕の胴部とみられる。時期は中世以降のものであるうか。須恵器は蓋杯の杯部と、提瓶の胴部で、どちらも焼成は良く、提瓶は自然釉がみられる。土師器は高杯の口縁があり、よく磨研した精製品である。B1号住居址から出土している。その他杯の脚部と思われる円孔を有するもの、手づくね状の茶碗、台付壺の底部などがある。

鉄製品はBP<sub>2</sub>ピットから出土した鉄鎌があるが鍛造品で曲りのある鉄板状を呈し、柄の着装部分は折り曲げて半筒状とし、先端部は実らず17センチをはかる。

砥石は四面とも凹状の使用痕があり、中には丸のみ状の使用痕もある。質は中～細目でA2号住居址床面から出土した。

## 5. 小 括

1. この遺跡の立地は北に展望のきく支丘陵先端の平坦な台地状地形で、横田町では横田高校グランド遺跡や日焼田遺跡など、弥生中期から古墳時代前期に当る住居址をとまなう遺跡と共通する地形である。
2. この遺跡にあっては台地上の平坦部（A区）と北東斜面（B区）とに住居址やピットが分布し、また斜面の流入黒色火山灰土中には土器片を多く含有しており、上方のA区は多くの遺構の存在することを示している。
3. 住居址は方形プランで側溝をもつ構造と側柱や掘り形外壁にも柱穴を有する点が注目される。また主柱が2本のものであるのも注目すべきである。
4. A1住居址から砥石が出土し、日焼田遺跡とともに古墳時代前期における鉄器の使用が明らかとなった。
5. ピットから古墳時代後期の土器とともに鉄鎌が出土し、その形状が明らかとなった。
6. この遺跡は住居址やピットがあり、出土土器から、古墳時代前期から一部平安、鎌倉期まで続く時期のものであり、中心は古墳時代前～中期ごろと考えられる。
7. A区にはなお広い面積の未調査区域があり、相当数の遺構一主として住居址が群集するものと考えられ、この地域ではまれな規模の遺跡と思われる。
8. 古式土師器はおおむね出雲地方平坦部のそれと類を同じくするもので、横田町内では日焼田遺跡、岩屋寺下遺跡に近いものである。

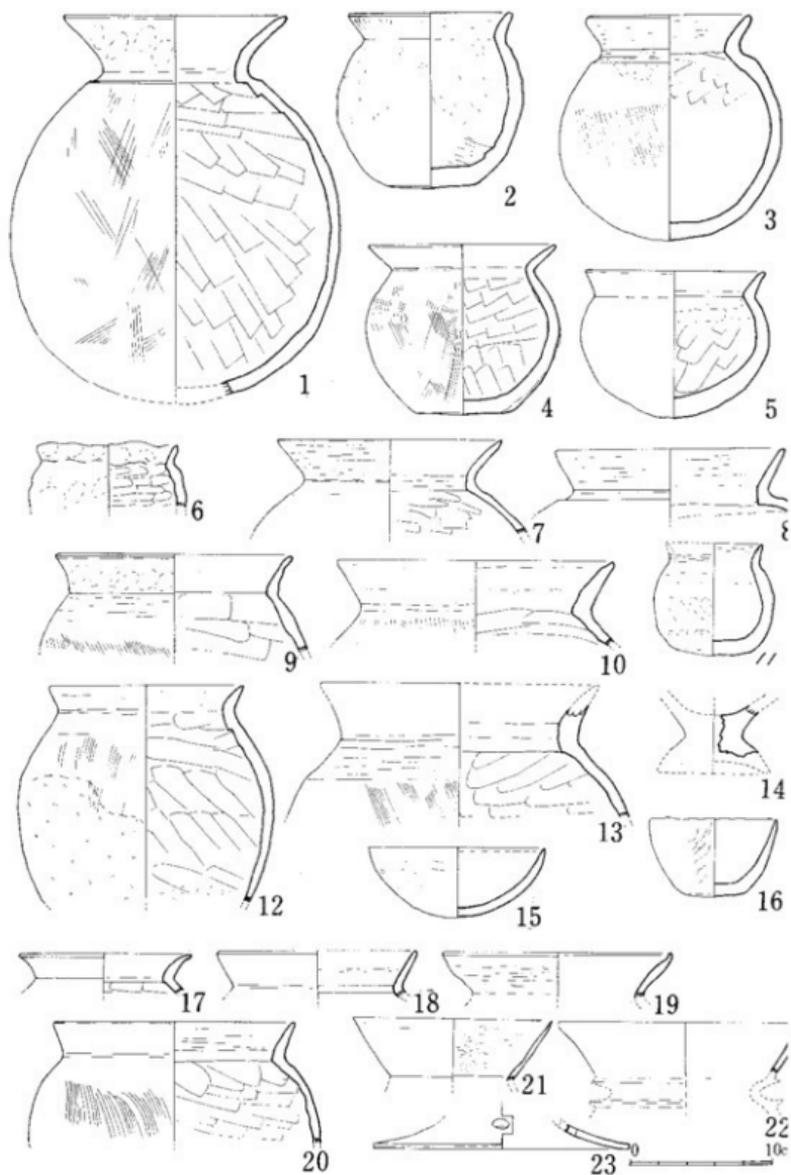
## (補 考)

ここでこれらの土器を他遺跡のそれと比較してみると、土師器についてはA区及びB区の一部で出土している遺構ともなわない甕形土器の口縁部は外反、直立、そして立上り部分に巾の大小はあるものの、いずれも複合口縁盛行期のもので出雲海岸部における「小谷式」以前に当てることが出来ると思われる。ただしL字状口縁が一部にみられ、埴の口縁のあることは「小谷式」併行期の遺物があり、A3号住居址によって代表される土器は大原郡大東町大東高校校庭遺跡出土土器の中心をなす部分に当たるとと思われる。そしてこの時期は古式の須恵器が伴出する時期であるが、この住居址においてはみられない。また大東高校校庭遺跡においては複合口縁の硬化したのものもあるが、この遺跡にはそれは見当たらない。そして一時期においてB区の遺構につながり須恵器は坏がやや立上り部分が低いものの提瓶の耳がしっかりしていることからすれば、山本 清編年の第Ⅲ期に入れてさしつかえなからう。

ちなみに横田町内での弥生土器終末期から古式土師器への移行を示す遺跡としては参考図にあげた追谷住居址と日焼田1号住居址がある。いずれも一つの住居址からまとまって出土した土器群で、中でも追谷住居址のものはほとんど完形品で占められ、日焼田1号住居址のものは一住居址からの土器出土量が極めて多い。これらの一括遺物はほぼ同時期と思われ、やや追谷住居址の方が先行するものの、日焼田1号住居址の壺形土器、甕形土器、台形土器のセットは出雲海岸部における「的場式」土器に対応するものであり、それは技法の上でも貝殻施文を使用するなどの共通性をそなえている。

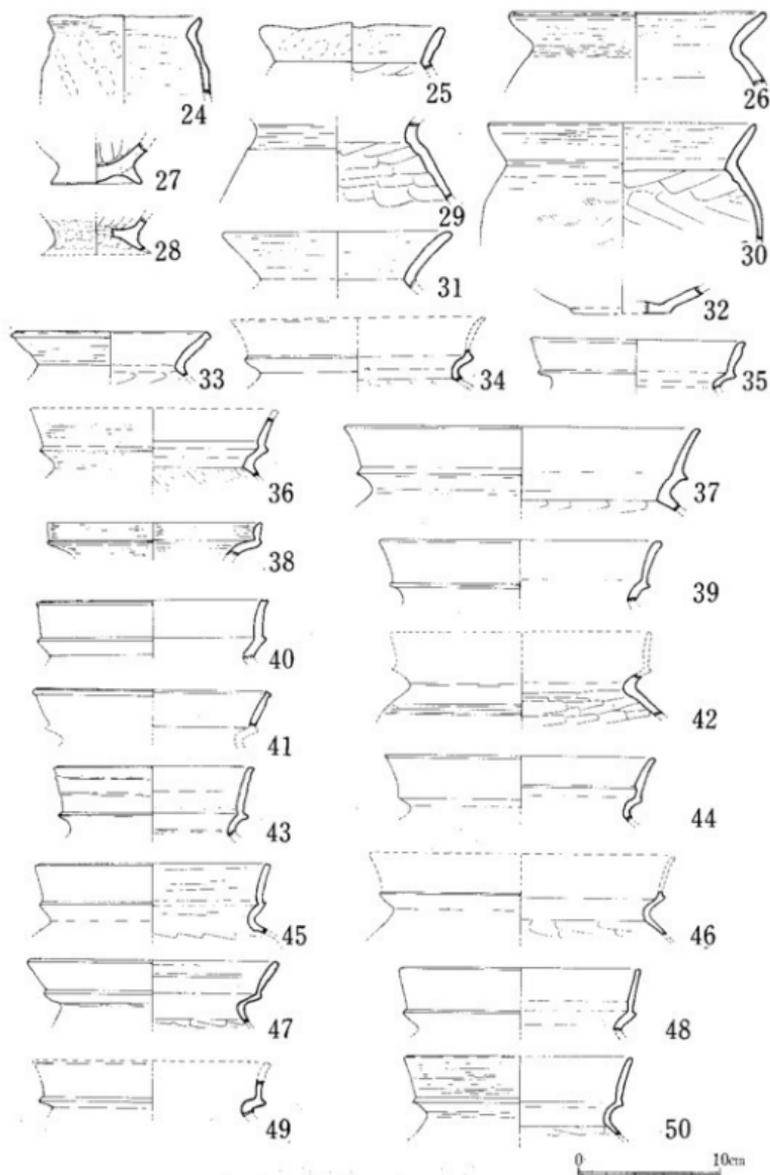
渋谷遺跡の土器はこれに次ぐもので「鍵尾式」→「小谷式」→(仮称)「大東式」とつづき、出雲山間部横田町内において弥生時代終末期から須恵器共存の古墳時代中期におよぶ一応の編年が可能であるといえる。そしてそれが海岸部の遺跡と大きな差もなく推移していることが明らかとなった。さらに注目すべきことは、これがいずれも住居址出土の土器で明らかになったことで、従来とかく問題にされがちであった墳墓出土の土器による編年が、この時期について一般的に普遍出来るきっかけを得たことである。

なお渋谷遺跡においてL字状口縁の内側を肥厚させる甕形土器片や、小形埴の口縁がみられることはA3号住居址出土土器群の前に畿内の布留式に共通する一時期を設定することが出来るものと考えられる。それがいわゆる「小谷式」併行期とみて大過ないであろう。

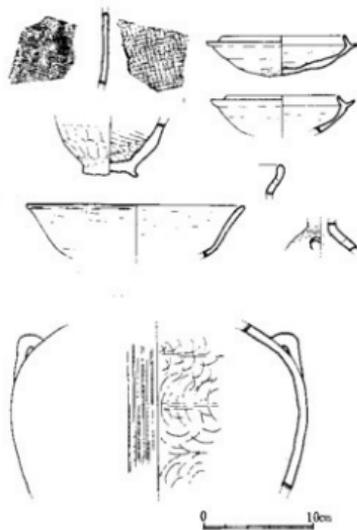


図Ⅲ-8 波谷遺跡出土の土器(1)

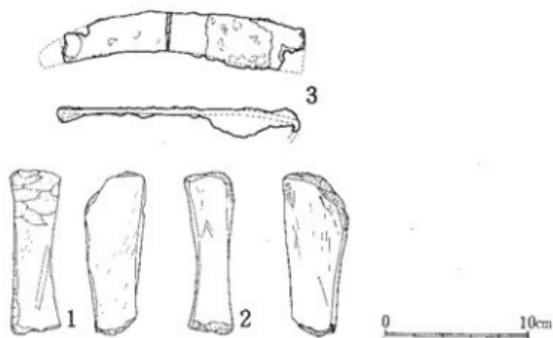
1~8 A3号住居址 9~23 A区出土



図Ⅲ-9 浪谷遺跡(A区)出土の土器(2)

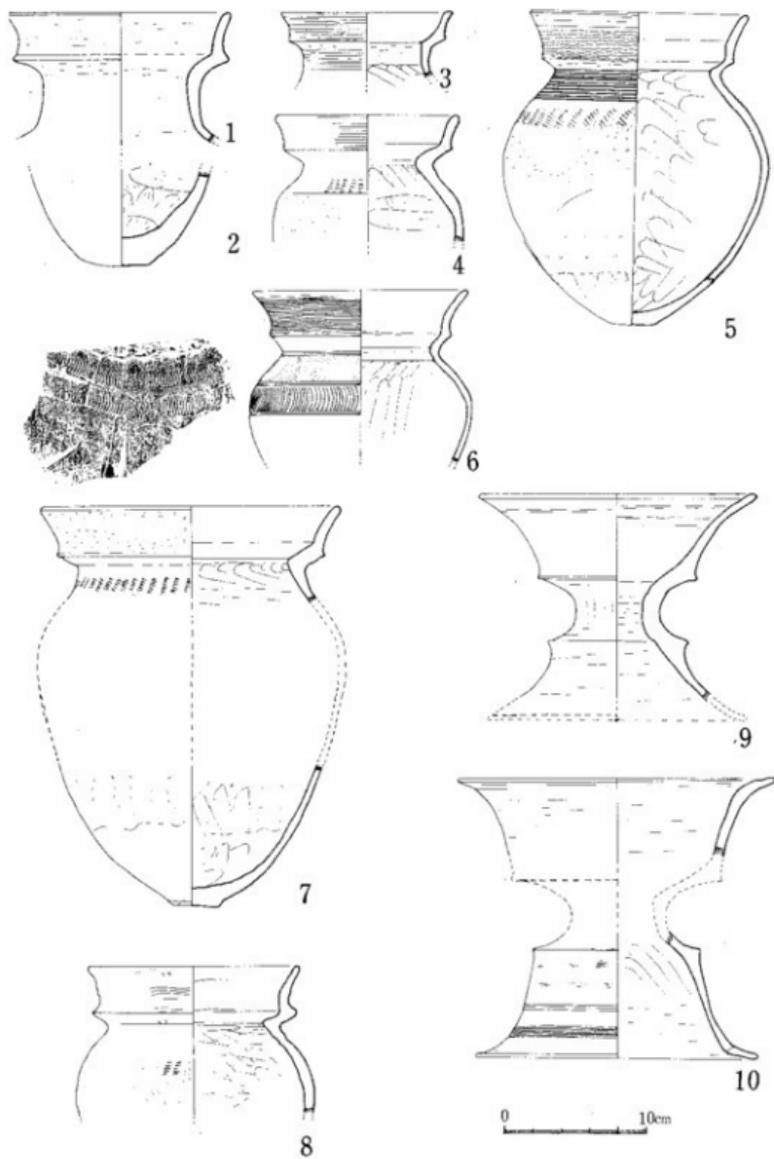


図Ⅲ-10 波谷遺跡(B区)出土の土器(3)

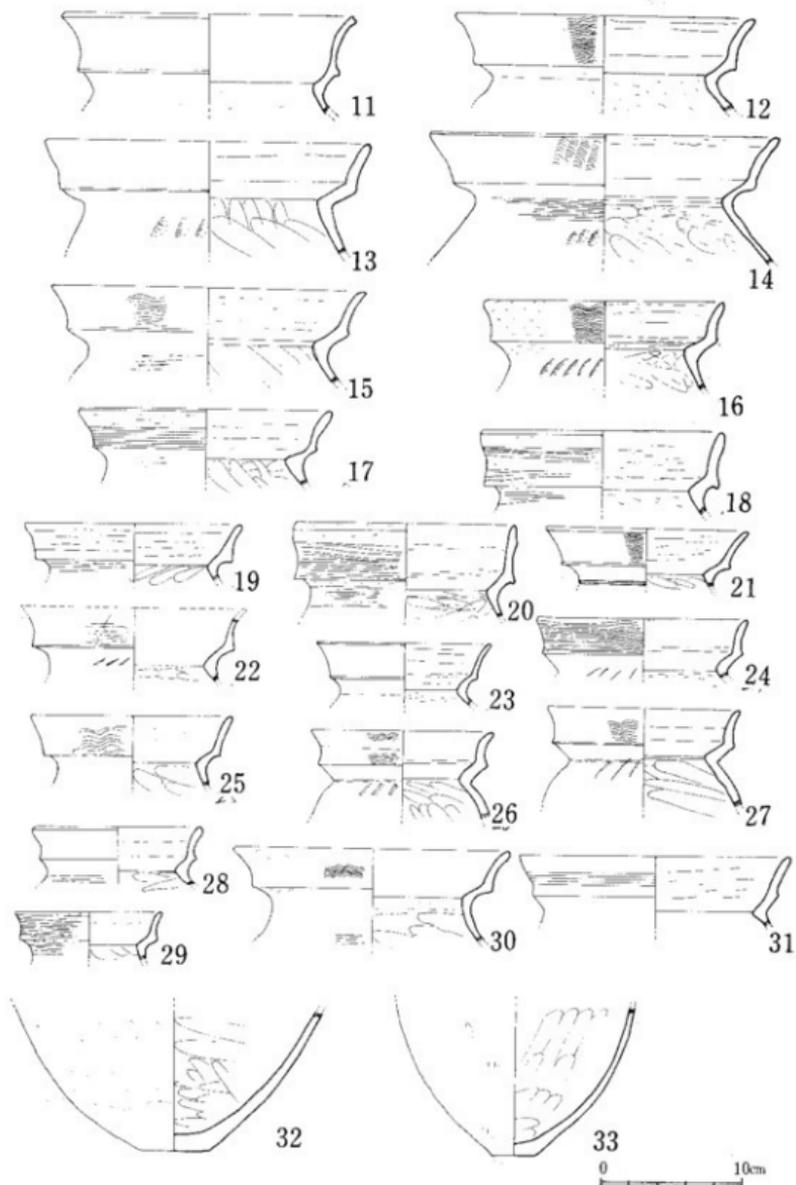


図Ⅲ-11 遺跡出土遺物(B区)

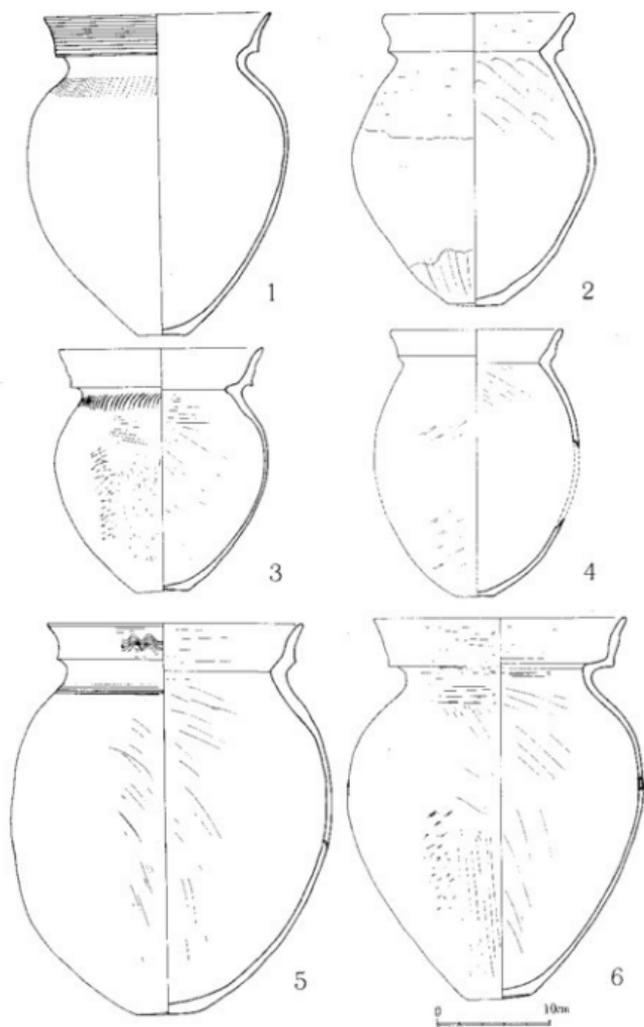
1.2 砥石 3 鉄鎌



図Ⅲ-12 (参考) 日焼田1号住居址の土器(1)



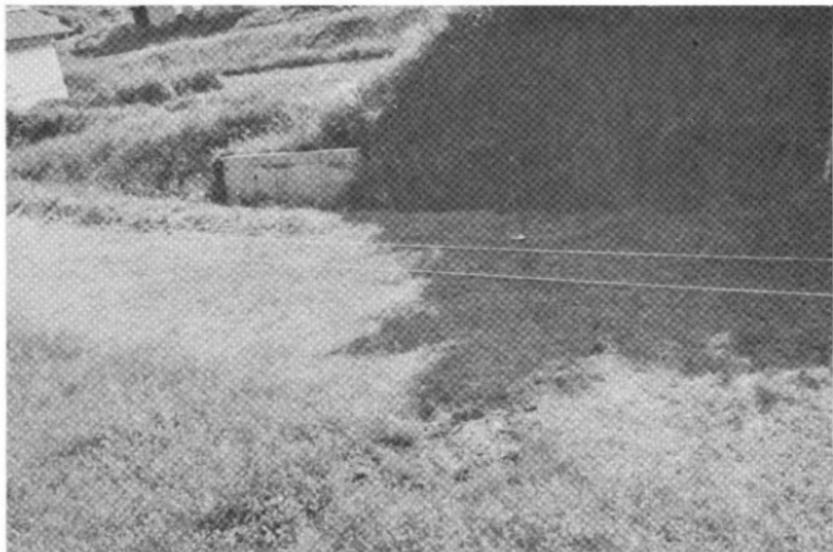
図Ⅲ-13 (参考) 日焼田住居址の土器(2)



図Ⅲ-14 (参考) 追谷住居址出土の土器

沢田宅裏遺跡

遠景



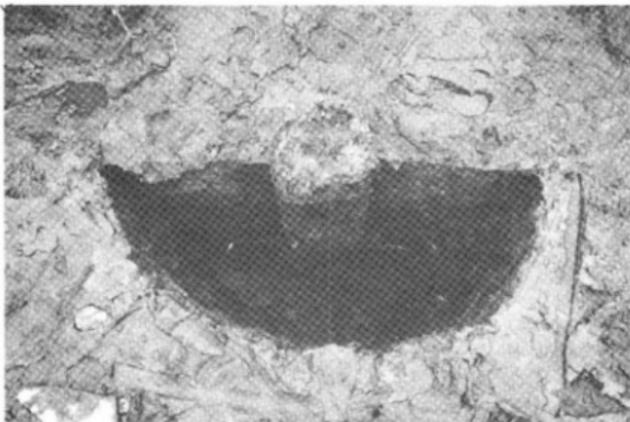
近景



P 2

柱

根



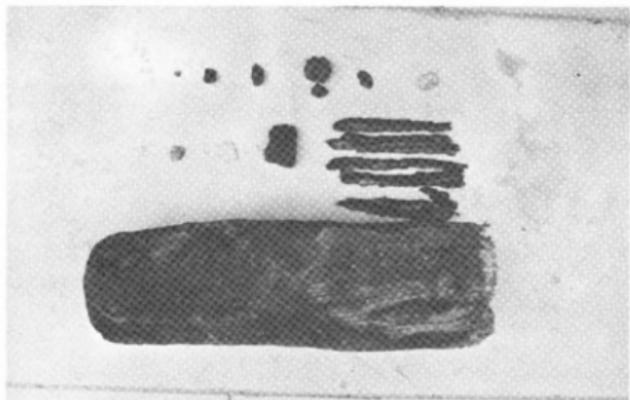
柱列と敷石群



出  
鉄  
陶  
柱

土

品  
滓  
片  
根



大池遺跡

遠景



近景



渋谷遺跡

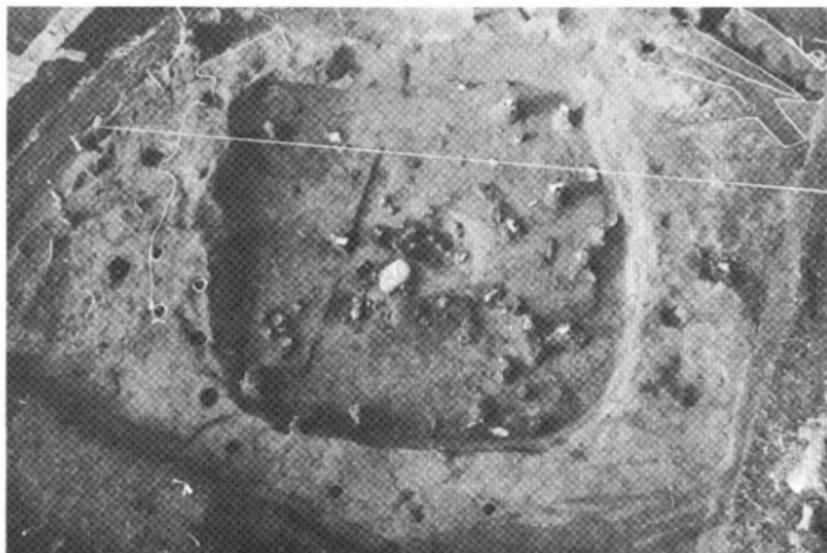
遠 景



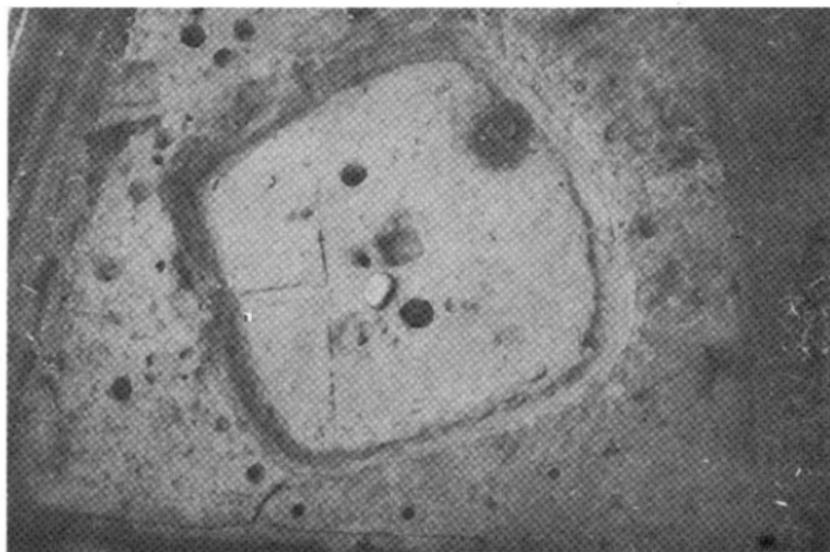
近 景



A3 住居址出土全景



同掘下げ全景



A 3 出土状況



階段路遺構 A



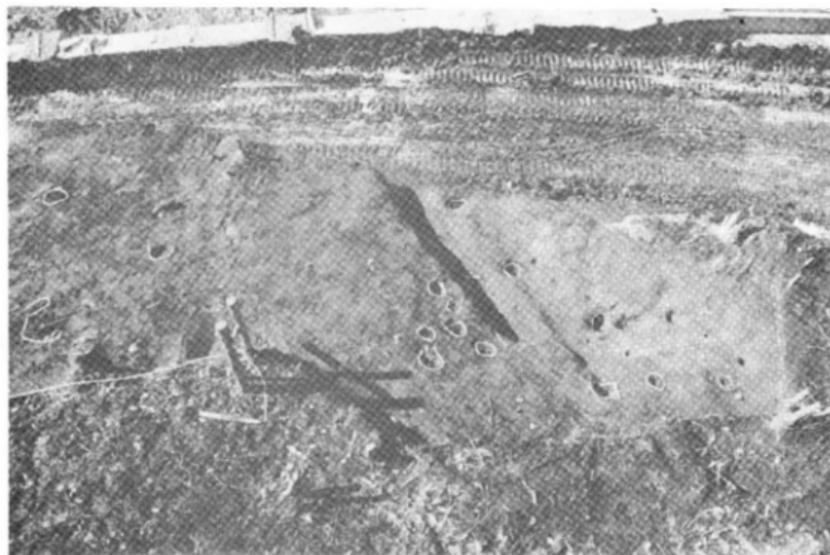
階段路遺構 B  
(断面)



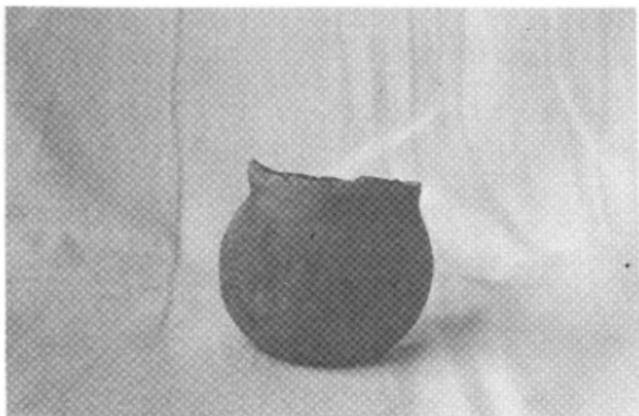
A1住居



A2住居

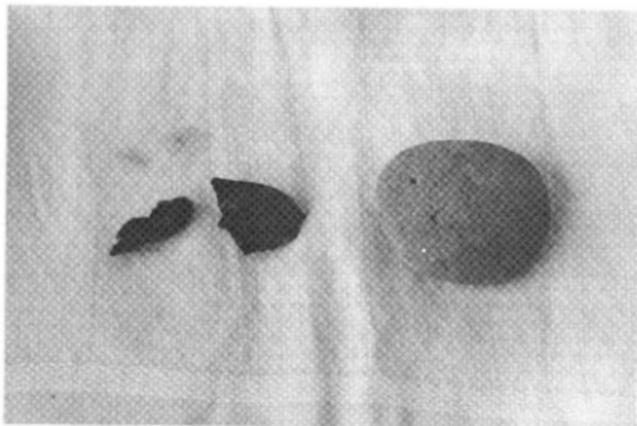


A3住居跡出土  
遺物



据 石





BP<sub>2</sub> 出土状況BP<sub>2</sub> 鉄鎌出土状況

沢田宅裏・鍵免大池・渋谷遺跡調査報告

昭和57年3月

発行 島根県仁多郡横田町  
横田町教育委員会

印刷 島根県仁多郡仁多町  
植田軽印刷所